

御配膳は殿上人、近年は被勤申之、一御とをりには、上臈佐殿内侍以下、次に公卿少々、正月十日御参内にかぎりて御とをりの事、公家衆之中にも參つけられたる御人數在之云々、此御とふりに被参公家衆は、一段規模のよし、藤宰相殿被申之也、一御立石のきはにて御下輿の砌、公家衆あまた被参て蹲踞被申候とき、其中一の上首にそと御ゑ玄やく在之て御参也、これを參會の衆と申て、昔より御人數定まる也、御退出のときも此分也、一禁裏様於庭上著座次第、先長橋殿の御ゑんのきはに、御劍の役已下御供衆伺候、次御供の同朋、走衆、次御出奉行也、走衆のうしろのへんに、御小者、公人朝夕以下在之、御供の衆は、御供の同朋迄に打刀を持引敷の上に著座、走衆は小太刀也、大雨にて御庭しるき時は、引敷の下に打板を敷と云説在之、一御立石とて、伏見殿の邊に昔より石立之、其きはにて御下輿也、御輿の御あとへんに、御朝夕まゐる也、一御裝束唐櫃の宰領には、公人つき申て、於長橋殿御直廬に伺候の同朋、井藤中納言殿にわたし申なり、一御道をば走衆も、だちをとり、太刀をはきて被参候、御立石より太刀を右の手にさげ、も、だちをおろして被参也、御供衆も、だちおろさる、也、御供の同朋、御小者などは、そのぎにおよばざるのみ也、但玄ぎによる也、一還御之後、御供衆、同朋、走衆、御出奉行、其日の當番衆已下、御太刀金進上之、御参内初の御禮也。

〔年中恒例記〕年中御對面并雜事少々

正月十日、御扇一本狩野進上之、御太刀被下之、御参内に御用之也、

〔後深心院關白記〕永和三年正月十三日、御参内、年始恒例、前驅四人、衣冠下結、以重冬、成量行冬、惟教朝臣、

次番頭八人、行次御牛飼八人、行次御車、直衣葉、雨皮持仕丁退紅、傘持舍人、次隨身五人、下毛野武音、秦兼茂、秦久方、秦久勝、下毛野武藤、次衛府侍齋藤三郎左衛門尉、眞下勘解由左衛門尉、朝山次郎左

足利義滿